様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　５月　２５日現在

研究種目：基盤研究（Ａ）
研究期間：2007～2010
課題番号：19251008
研究課題名（和文）　アンコール遺跡における出土貿易陶磁器の様相解明

研究課題名（英文）　The resolution of the new aspects of the trading ceramics detected from the Angkor monuments

研究代表者
山本　信夫（YAMAMOTO NOBUO）
早稲田大学・理工学術院・准教授
研究者番号：30449342

研究代表者の専門分野：考古学、貿易陶磁
科研費の分科・細目：人文社会系、人文学、史学、考古学
キーワード：クメール陶磁、中国陶磁、アンコール・トム、バイヨン寺院、考古データベース

１．研究計画の概要

研究の対象となるバイヨン寺院、プラサート・スープラ遺跡は、いずれもアンコール時代における都市の中心に位置し、往時の都市設計を考察する上で重要な遺構である。本研究は、アンコール遺跡群における発掘調査から出土した貿易陶磁を中心とした出土遺物の分析をもとにして、(1) 東南アジア諸国に通用する精度の高い考古学的基準資料を構築し、(2) これに基づきアンコール遺跡群における空間活用がどのように展開し廃絶され、現在に至ったのかという過程を明らかにすることである。更には、往時のアンコール遺跡群の都市空間の再現に向けての見通しを得ることも重要な課題としている。

２．研究の進捗状況

（1）東南アジアにおいて未確立な発掘作業基準マニュアルを作成し、バイヨン寺院発掘調査に実践的に利活用し、調査研究の水準を高めている。

①平成 19・20 年度はプロジェクトの進行計画に合わせ、バイヨン寺院南経蔵・中央塔の発掘調査を実施した。当該遺構は上部建築の残存は良好なため、地下部分の発掘調査は必要限度に止めている。成果として、南経蔵基壇内部に特異なラテライト構造物が発見され、基壇中央上面では鎮壇壙の検出と盗掘を免れた金銅・銅製品鎮壇具一式が出土した。基壇化粧の砂岩材一部には簡単な刻文字・記号があり、こうした金石文字の意味解明のため記録を行った。

中央塔では今後の修復補強を目的とするための基壇下部発掘を部分的行った。盗掘され、過去にフランス極東学院により調査済であるが、今回の発掘で中央塔基盤は特別強固な仕様ではないという点も導きだされた。以上の調査箇所は生活空間ではなく、貿易陶磁器編年に有効な資料は得られていない。

②平成 21 年度はバイヨン寺院南東外郭部の発掘を行った。成果として、外壁よりさらに外部へ続く 14 世紀前半の厚い整地が確認され、この時期にも大規模な土木工事を行った可能性が高まった。これにより過去実施されたプラサート・スープラの調査結果を再検討する必要も生じる。また工房（石材加工、金属生産）関連の遺構・遺物や寺域外への排水施設の検出などバイヨンの造成過程に関する知見を得る事ができた。さらに下層では、アンコール・トム南門とバイヨンを結ぶ南北軸線に沿って２本 1 対の細い溝状区画（溝間隔は約 2.5m）が検出された。これはバイヨン外郭壁のすぐ南で東へ屈折し、バイヨン初期の占地や道路関連、あるいはバイヨンより古期区画の一部を示唆するとみられる。トムの中央部（＝バイヨン寺院）直下における古期遺構の検出は初例となる。

今回調査では陶磁器類も種類豊富であり、本題の編年研究深化を進めるうえで良好な資料が得られた。

（2）遺物整理基準マニュアルを作成中であり、出土遺物のデータベース化作業を開始した。ただし平成 19～21 年度は発掘調査が中心となったため、平成 22 年度に遺物整理・図化などの作業が集中する。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（1）現地カンボジア人専門家への技術指導（発掘調査・遺物整理・報告書作成）は段階

的に訓練しており、すべてを到達点に導くための時間はやや不足している。
日本国内においてもやや高度に属するマニュアルを今回使用しているため、その達成度は6割程度である。しかし、最終年度には一定の力量が獲得される見込みがあり、以後の研究発展に期待をもつ。激しい気候風土においては日本並とはいかず、実質的な現地換算ではそれ以上の達成度をみる必要があろう。
（2）遺構分析においては平成21年度において新たな検討課題が生じており、研究的刺激も大きい。努力したい。
（3）遺物においては金属や道具など特殊品もあり、保存処理、化学分析など多方面の研究者の応援を得るべく活動している。貿易陶磁資料の出土は日本など東アジアと比較研究中であり、最終年度にはまとめとしたい。

４．今後の研究の推進方策
（1）上記した本申請の 1－（2）に接点となる成果も今回出ており追究を進める。バイヨン寺院はアンコール王都の最中心部に位置し、国家安泰の表象的施設でもあるから、その維持継続は国家的威信を内外に示す指標と考えられる。従って寺院建設以前から建設以後に及ぶ過程の分析はアンコール王朝・都市の盛衰を端的に知る素材となる。現在、王宮、寺院といった中核的建築物の解明、復元が進む中、バイヨン周辺部の継続的な調査は考古学的な都市解明の先行研究とできよう。
（2）今回の調査ではクメール文化における建設システム、宗教儀礼、生産と流通、交易システムなどの解明に結びつくものが多い。これらは当初想定し得なかった課題も含まれ、他の学問領域のの応援を必要とする。
①建築システムの追究。石材、道具、刻字・記号・刻線、石材産地の追跡調査。基壇化粧の砂岩材に刻字・記号があり、石材の使用建物、位置、数量、方位などを示す可能性がある。碑文とは異なるクメール金石文字の解明が必要で、現状ではこの種の研究実績は見られない。また加工途中の石材（粗割段階）や道具石（鉄鑿砥石）のまとまった発見は研究深化に有効となる。
②貿易陶磁器、クメール陶器・土器、金属生産、道具、宗教関係遺物。貿易陶磁器は中国・ベトナム・タイ・日本産があり、年代推定の基準資料の他、交易形態の解明に有用となる。クメール陶器・土器は胎土組成分析により生産地特定化を進めアンコール消費活動の一端を分析する。鉛及び銅製品から鉛同位体を抽出でき、鉛生産地の特化を進める。以上の中で建築石材や金属関連及び宗教関連遺物の追究はクメールの巨大建造物の構築システム分析に密着しており、今後総合的な研究も必要と考える。継続的な研究を切望したい。

５．代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計1件）
（1）下田一太、「バイヨン寺院の内外回廊の建造過程をめぐる再考察－1999年と2007年の発掘調査結果を交えて－」、『東南アジア考古学29号』2009年（査読あり）
〔学会発表〕（計5件）
（1）山本信夫、内田悦生、中川武、中松万由美、「カンボジア、バイヨン寺院南経蔵中央坑における出土金属製品の出土状況と組成分析について」、日本文化財科学会第25回大会、鹿児島国際大学、2008年6月14～15日
（2）中松万由美、中川武、下田一太、「カンボジア、バイヨン寺院の建造過程をめぐる新見解−カンボジア、バイヨン寺院に関する研究（I）−」、2008年度日本建築学会大会（中国）、広島大学、2008年9月20日
（3）山本信夫、「バイヨン寺院の考古学」ユネスコ世界遺産BAYON公開連続講演、早稲田大学、2009年4月17日
（4）中松万由美、中川武、「バイヨン寺院、南経蔵周辺遺構における建造年代試論－カンボジア、バイヨン寺院に関する研究（II）−」、2009年度日本建築学会大会（東北）、東北学院大学 泉キャンパス、2009年8月26～29日
（5）中松万由美、「バイヨン寺院の建造過程をめぐって－考古学的発掘調査の成果から－」、日本カンボジア研究会（プノンペン部会）、カンボジア王立法律経済大学、2010年2月27日
〔図書〕（計4件）
（1）中川武（編）、『アンコール遺跡調査報告書 2007』、日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA）、2007年：210頁＋図版41点
（2）中川武（編）、『アンコール遺跡調査報告書 2008』、日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA）、2008年：239頁＋図版11点
（3）中川武（編）、『アンコール遺跡調査報告書 2009』、日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA）、2009年：320頁
（4）中川武（監修）、『神々の寺院、バイヨン』、日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA）、2009年：67頁

〔その他〕
「バイヨン・インフォメーション・センター」にアンコール出土陶磁器を展示。所在地、カンボジア・シェムリアップ
カンボジア内外の観光・研修に公開。
解説（日・英文）は上記の図書（4）に掲載。山本信夫、中松万由美、「アンコール王朝の盛衰と陶磁器」22－27頁。